シリーズ

季（とき）のことば「夏」

「ことば」によって
豊かな四季を楽しむ私たち日本人。
名句や名歌を訪ねながら、
日本文化の豊かさをご紹介いたします。

季（とき）のことば「夏」

私たち日本人は、季（とき）に名前をつけ、
豊かな四季を楽しむ術をもっています。
季（とき）のことばの美しさを感じ、
季節のうつろいの中に
「ゆとり」をみつけてみませんか。

「夏」という言葉を聞いて、皆さんはどんな言葉を連想するでしょうか。「夏」の語源には、「暑（あつ）」が転じたもの、「熱（ねつ）」が転じたもの、「生る（なる）」が転じたものなど諸説ありますが、その中に「撫づ（なづ）」が転じた言葉という説があります。現代語にすれば「撫でる」ですが、その所作には“霊的な生命力を与える”という意味合いもあるそうです。

暦の上で夏は、「立夏」（2021年は５月５日）から「立秋」（同８月７日）まで。爽やかな空を鯉のぼりが泳ぐ端午の節句から、梅雨を経て、新春からの半年間のけがれを祓い清める「夏越の祓」（なごしのはらえ、同８月７日）までの時期にあたります。田植えを終えたばかりの苗の成長を促すように、そっと撫でて通る風、けがれを祓うための人形（ひとがた）を撫物（なでもの）と呼ぶなど、古の人々が抱く「夏」のイメージは、現代の我々よりも優しいイメージだったのかもしれません。

五月雨の晴れ間にいでて眺むれば
青田すずしく風わたるなり

良寛

夏のことば

菖蒲葺く［しょうぶふく］

芳香を放つ菖蒲は邪気を祓うとされ、５月４日に蓬を添えて軒に挿した。用いるのは花菖蒲ではなく、サトイモ科の菖蒲。

麦の秋［むぎのあき］

「秋」には「実りの時」という意味がある。麦が熟して金色の穂をなびかせるのは５月から７月なので、夏の季語。

短夜［みじかよ］

１年で一番夜が短くなるのは夏至（６月21日）。平安時代には逢瀬の時間が短くなると嘆く様子を象徴する言葉だった。

青嵐［あおあらし］

初夏の頃に吹くやや強い南風。新緑や青々とした田んぼを吹き抜ける様子を想起させ、季節の明るさを感じさせる季語。

五月雨［さみだれ］

梅雨の時期の何日も降り続く雨のこと。ここから転じて物事が続く様子を「さみだれ式」というようになった。

薬降る［くすりふる］

「薬日」と呼ばれた旧暦５月５日の午の刻（正午頃）に降る雨のこと。神水とも呼ばれ、薬効があると信じられていた。

小満［しょうまん］

二十四節気の一つで、2021年は５月21日。陽気が盛んになって草木が青々と茂り、万物が成長して満ちるという意味。

早苗饗［さなぶり］

田植えを無事に終え、山の神様に感謝する祝宴。「早上り（さのぼり）」とも呼ばれ、田植え後の神を送る祭りでもあった。

夏の名句

東京や菖蒲葺いたる家古し
正岡子規　【季語】菖蒲葺く

ざぶざぶと白壁洗ふわか葉かな
小林一茶　【季語】若葉

白牡丹といふといへども紅ほのか
高浜虚子　【季語】白牡丹

夏めくや庭土昼の日をはじき
星野立子　【季語】夏めく

荒磯や月うちあげて青あらし
大島蓼太　【季語】青嵐

夏の名歌

春過ぎて夏来にけらし白妙の
衣ほすてふ天の香具山
持統天皇

陽に透きて今年も咲ける立葵
わたしはわたしを憶えておかむ
河野裕子

※「季語」とは、連歌、俳諧、俳句において用いられる特定の季節を表す言葉。